

# 日本銀行旧小樽支店 金融資料館

二〇〇三年にオープンした日本銀行旧小樽支店金融資料館は、今年で開館五周年を迎えました。開館以来五〇万人ものお客様におこしいた danki、小樽の新たな観光名所ともなっております。お近くにお出向きの際は、ぜひお立ち寄りください。







アイヌの守り神シマフクロウをモチーフにしたとされるレリーフは、内壁に12体、外壁に18体飾られている。

小樽にある金融資料館は、平成十四（二〇〇二）年九月まで日本銀行の小樽支店として営業していた。金融資料館としてオープンしたのはその翌年の五月十四日で、これまでの入場者数は五〇万人を超えた。日銀の広報施設であるとともに、小樽の観光名所としてすっかり定着している。

屋根に五つのドームが配され、れんがの表面にモルタルを塗って石造り風に仕上げられた、ルネサンス様式を取り入れた美しい建築は、表を通りすぎる観光客からも始終カメラを向けられている。

だが中に入ると、さらに美しい。入ってすぐのロビーは、カウンターを隔てたかつては事務机が並んでいたはずの営業場とあわせて、天井までの高さ一〇・五メートルという吹

き抜けになっており、周囲の壁まで見渡すかぎり柱が一本もない。派手さはないが、思いがけないほど静かに大きく広がる空間に、心地よい落ち着きを味わえるのである。

上部の窓のシャッターが下ろされて採光が加減され、高く周囲をめぐる回廊のところどころにライトアップされたシマフクロウのレリーフが浮き立っている。なんとなく俗界を離れたような雰囲気すら漂う。

シマフクロウは、アイヌの守り神であることにちなんだといわれ、また夜目が利くことから銀行の金庫番としてつけられたとも言われている。内壁に一二、外壁には一八のシマフクロウが、今も夜目を利かせて見張っている。

カウンターには窓口名を記したプレートが残され、銀行として機能していた時代を空想させる。カウンター下やロビー周囲の腰板には岐阜県赤坂産の大理石が張られている。これはこの当時に開設された各地の日銀支店の多くに共通した仕様だという。

カウンターを回って営業場のほうに入ると、日銀の歴史とあわせて、



柱のない大きな吹き抜けの営業場。屋根はれんがの壁から鉄骨を組んで支える構造で、創業初期の八幡製鉄所製の鋼材が使用されている。



道内一の金融拠点だった“北のウォール街”の街並みのジオラマ。最盛期には、地元金融機関に加えすべての財閥系大銀行が軒を連ねた。



二〇〇二年秋まで実際に使用されていた金庫。内部を再現展示している。

かつて「北のウォール街」と呼ばれた小樽の歴史もわかるように展示が行われている。

眺めていると、蒸気機関車の警笛、馬車の走る音、船の汽笛などが聞こえてくる。館のすぐ近くに廃線になった手宮線の線路が残っているが、そこから石炭の積み出しが盛んに行われ、表の通りを馬車が走り、港に多くの汽船が行き交っていた、そんな時代の雰囲気再現した音響だという。

小樽は、江戸時代からニシン漁の漁港として、また北前船の寄港地として賑わってきたが、明治十三（一八八〇）年に北海道で最初の鉄道が札幌―小樽間に開通したことによって交通の要衝となり、商業港としての性格を強める。二年後には石炭産地の幌内まで路線が延び、石炭の積出港となったことで、さらに大きな発展が始まった。

小樽に日銀の派出所が設置されたのは明治二十六（一八九三）年のことだが、小樽の急速な発展にあわせ、明治三十（一八九七）年には出張所に格上げされている。

さらに日露戦争によって南樺太を

日本が領有すると、樺太への資金輸送の拠点として小樽はいっそうの繁栄を迎える。小樽には商社や銀行の支店が続々と開かれていった。

そして明治三十九（一九〇六）年、日銀の小樽出張所は支店に昇格する。そのとき函館にあった北海道支店は出張所に格下げされ、札幌出張所は廃止されている。つまり小樽が北海道経済の第一の拠点都市と見なされるまでになったのである。

小樽支店は、商家のような木造二階建てだったが、近くに近代建築を新築し移転することになった。日銀としては本店、大阪支店に次ぐ建築費を投入したというから、それほど小樽の将来性が見込まれていたということだ。

設計は、日本銀行本店を設計した辰野金吾が全体を統率、弟子の長野宇平治が実質的な建築責任者として基本設計をし、辰野に抜擢された岡田信一郎が長野の基本設計に基づいて実施設計から施工図までを担当した。

長野は、ちょうどその頃、台湾総督府庁舎の建築設計競技で最高位入選し、著名な建築家となっていた。

また岡田は小樽支店の仕事を終えた直後に、大阪市中央公会堂のコンペに一等入選し、若き俊英として名を知られるようになる。つまり、陽の昇る勢いにあった頃の気鋭の建築家二人が、日本建築界の頂点にあって代表作となる東京駅に取り組んでいた時期の辰野のもとで行った仕事で、小樽支店だった。この三人の共同の仕事はこれが唯一だという。

小樽支店は、明治四十五（一九一二年）七月に竣工した。同時期に長

階段の手すりや部屋の天井などに施された日本銀行の行章のマーク（右）や、アメリカ製の窓のシャッター（左）など、凝った細部が観る者を楽しませる。







望楼へと続く螺旋階段。小樽経済が活況を呈していた頃、業況調査として、望楼から港の商船を数えたという。

## INFORMATION

### 日本銀行旧小樽支店金融資料館見学

- 所在地 北海道小樽市色内1-11-16（JR小樽駅から徒歩10分）
- 開館時間 9:30～17:00（入館は16:30まで）
- 休館日 月曜日（ただし月曜日が祝日・振替休日のときは、その翌日以降の最初の平日）および年末年始（12月31日～1月5日）  
（注）このほか設備点検等のための臨時休館日あり。
- 入館料 無料
- 展示解説 開館日の14:00から約30分、金融資料館職員が建物を含め展示解説を実施（事前予約不要。14:00までに1階エントランスに集合）。
- 団体見学 20名以上の団体見学を希望される場合は、あらかじめ電話でご連絡ください。  
申込先：日本銀行旧小樽支店金融資料館  
電話番号：0134-21-1111
- その他 駐車場は団体バス、身障者の方専用（要予約）。詳しくはホームページを。  
<http://www3.boj.or.jp/otaru-m/>



野は、小樽支店の近くの北海道銀行も手がけていた。外観の雰囲気は似た建築である。また工部大学校造家学科（現東京大学工学部建築学科）の第一期生として辰野金吾と同期だった曾根達蔵が三井銀行小樽支店、佐立七次郎が日本郵船小樽支店と、四人の一期生のうち三人が小樽で建築を手がけている。当時の一流建築家たちが腕を競うかのようにして、小樽に続々と立派な近代建築が立ち並んでいた。

やがて一九〇の主要銀行の支店が集まり、小樽に「北のウォール街」と呼ばれるような景観が生み出された。金融資料館には、一九二〇—四

〇年代にかけてのその景観のジオラマが展示されている。当時の建物は意外なほど今も残されているので、このジオラマで確認してから通りを歩くと、今の街並みにかつての「北のウォール街」が透かし見えるように楽しい。

さて、営業場から奥へ入ると、日銀の業務をわかりやすく紹介するコーナーになる。さらに奥には金庫が二つあり、中に入ることもできる。一目散に金庫だけを見ていく人もいるそう。

二階からは、残念ながら安全上の理由から公開していないが、階段の手すりには注目したい。戦中に

供出したためほとんどが木に換えられているが、いくつか残っている鉄物の支柱には日銀のマークが入っている。

今回は特別に二階から上も案内してもらい、屋根裏にまで入れてもらった。この建築に使われたれんがは北海道産と大阪産で、合わせて約二四五万個。そのれんがの壁の上に鉄骨を小屋組みして屋根を支えているので柱が要らず、広々とした吹き抜けの空間が実現している。鉄骨は、八幡製鉄所で造られたものという。

屋根裏は、その鉄骨の組み合っているだけの空間だが、足場となる板が渡され、照明もついていた。営業場

に吊り下げられた大きな照明の保守管理作業などのため、時折人が入る必要があるのだという。

建物の正面にある四つのドームは装飾で、裏手にある大きな望楼のみが螺旋階段を登って人が入れるようになっていて。望楼内は思ったより広く、やはり窓からの見晴らしが楽しい。現在は大きな建物にさええられて海はほとんど見えなかったが、昔はここから港の船を数えて業況を観察したそう。

金融資料館は、日銀の歴史を小樽という街の歴史とあわせて実感的に知ることができて面白い。金融が生々しく見えてくるようだ。